

# 日本政府出展事業（日本館）基本計画骨子（案）

※ 本案は作成途中のもので今後の内容変更があり得ます。

## 1. はじめに

本基本計画は、2025年大阪・関西万博政府出展事業（以下、「日本館」という）の基本構想<sup>1</sup>（2021年4月策定）をもとに、日本館の各要素をより具体化し、今後の実装指針を示すものである。

## 2. 大阪・関西万博 開催の意義

国際博覧会は、人類の科学的・文化的な成果や新たな未来像を提示する世界の祭典である。

日本は、1867年パリ万国博覧会から多くの国際博覧会に参加し、1970年に初めて日本で開催された日本万国博覧会（大阪万博）以降、万博のホストを契機として、インフラ整備や都市開発などを通じて日本自身が大きな飛躍を遂げるとともに、科学的・文化的な成果や新たな未来像を提示するなど、国際社会に大きく貢献してきた。

そして21世紀の万博は、2005年愛知万博を機に、人類の活動の変化と地球環境への影響をはじめとした人類共通の課題に対する理解を助け、その解決に向けた道筋のあり方を発信してきた。

現在、温室効果ガス等の気候変動対策、生物多様性保護など、一つの国だけでは解決できない地球規模の様々な課題が人類の前に立ち現れており、持続可能な社会の構築と豊かな社会生活との両立をいかに達成すべきかが求められている。

大阪・関西万博は、持続可能な開発目標（SDGs）達成の目標年である2030年を5年後に控え、大阪・関西万博はSDGsの達成を検証し、さらにはその先の世界（SDGs+beyond）に貢献する国際博覧会とする。

2025年に行われる大阪・関西万博は、世界が危機に直面した新型コロナウイルス感染症を経て企画される初めての万博となり、そのテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン（Designing Future Society for Our Lives）」である。

このテーマは、世界が様々な課題に直面する中で、参加者一人一人に対し、「いのちが輝くとはどういうことか」「いのちにとって豊かな・幸福なあり方は何か」を問いかける。さらに、地球

<sup>1</sup> 日本館の方向性について検討するため、昨年7月からワークショップを開催し、計9名のクリエイターを中心的基本構想案を検討。2021年4月、日本館の出展目的・建築空間・設計・展示のあり方、日本館テーマ、推進体制（総合プロデューサーの設置）等を盛り込んだ基本構想を策定した。

<https://www.meti.go.jp/press/2021/04/20210413006/20210413006.html>

規模の課題への対応を豊かさの中に織り込みながら、「輝くいのち」「幸福で豊かないのち」を支える社会を実現していくために、何をすべきかを問いかける。

大阪・関西万博では、それらの間に対する世界の知とベストプラクティスを結集する。

また、AI や IoT、ロボット、ビッグデータをはじめとするデジタル技術を活用して社会的課題の解決と経済発展を両立させる「Society5.0」の実現に向けた取組を実装・実証し、国内外の多様なプレイヤーによるイノベーションを促進する「People's Living Lab (未来社会の実験場)」とする。

さらに、多様な価値観を尊重しながら、「いのち輝く未来社会」を築いていくための共創 (co-creation) を推進する。

来場者・出展者をはじめ、大阪・関西万博に関わる一人一人が、未来社会の作り手である。

大阪・関西万博は、参加者一人一人が未来社会に向けた気づきを得るきっかけをつくり、そのような気づきを参加者が自らの社会生活に活かしていくことで、いのち輝く未来社会への営みを加速する「場」となっていくことを目指す。

### 3. 日本館の検討の視点

#### (1) 大阪・関西万博テーマの具現化

日本館は大阪・関西万博の顔であり、大阪・関西万博の掲げるテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を、ホスト国政府としてプレゼンテーションする拠点となる。

そのためには、日本古来の自然観・死生観をふまえつつ、世界中の一人一人のいのちや、地球の中で生きている様々ないのちそのものの方に向き合っていくことが必要である。その上で、持続可能であり、かつ個々のいのちが尊重される豊かな未来社会への展望を示唆する館としていく。

このプレゼンテーションは会期中のみならず会期前・会期後も含めて実践され、来場者や日本館に関わった人々に対して未来の作り手としての気づきを得る機会を提供する。

#### (2) 日本の取り組みの発信

日本としての世界に対する貢献のあり方を示す観点からは、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博全体のテーマに関する日本独自の取り組みの発信や、SDGs の達成や SDGs の先 (+beyond) の議論への貢献といった視点をもつことが必要である。2020年10月に日本が「2050年カーボンニュートラル」を宣言した事に伴う各種施策等<sup>2</sup>の方向性を踏まえ、今後世界に貢献しうる日本の先端技術等の展示・体験を組み入れる。

<sup>2</sup> 例えば、2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略（令和2年12月経済産業省）や環境白書（令和3年6月環境省）。

### （3）国際的相互理解の促進

日本館は、各国の首脳やVIPをもてなすホスト国政府館としての外交上の役割を持つことから、先進国・途上国を含めた参加各国や国際機関との相互理解促進の観点も考慮する。

### （4）次世代の参加機会の確保

これまでの国際博覧会において、新たな才能を育成するための挑戦の機会が確保されてきたことをふまえ、日本館のクリエーションにおいても、若い世代のクリエイター等の参加を積極的に推進する。また、子どもたちの社会教育の場として、子どもたちの参加・体験を重視する。

## 4. 展示・建築について

### （1）日本館のテーマについて

＜日本館のテーマ＞

「いのちと、いのちの、あいだに - Between Lives -」

＜テーマコンセプト＞

来場者は、他者と自分、人と人以外、生物と非生物など、様々ないのちといのちの「あいだ」（境界・差異・関係性）を見つめることで、それぞれのいのちの尊さや、互いに支えあっている存在であることを自覚する。

自分たちが大きな地球の中で生きていることに気づき、他のいのちと共に創しながら大きな循環を生み出す大切さを学ぶ。こうした一連の体験を経て、SDGsに代表される社会課題を自分事として咀嚼し、未来社会のつくり手としての行動変容を促す。

### （2）テーマをふまえた日本館のあり方

テーマである「いのちと、いのちの、あいだ」の「あいだ」には、関係性・差異・境界といった意味が込められている。

日本館では、現代社会の中で見えにくくなっている「いのちと、いのちの、あいだ」を見つめることで、他者や環境とのつながりの中で生かされている自分たちの「いのち」を

思い、自らが地球といふのうちの束（船）の一部であるということへの気づきの機会を提供する。そして地球の裏側で起こっていることも自分の生活に繋がっているということを体感するとともに、プラネタリーバウンダリーや生物多様性についても一人一人のActionが必要であることへの共感を促していく。

その結果、来場者一人一人が「万博チルドレン」として、よりよい未来展望に向けた行動を起こすきっかけとなること目指す。

## 5. バーチャル・コミュニケーションについて

日本館においては、リアルとデジタルは各々独立するのではなく、互いに連動するよう両空間を設計する。また、「来場」という概念を拡張し、これまで物理的に万博会場を訪れることができなかつた人々の来場を可能とする。

## 6. 体制・組織

日本館を構成する各要素の分野特性に応じた検討体制を構築するとともに、それらを横断的に監修し、各分野に対し指示・提案等を行う総合プロデューサーを配置する。

## 7. スケジュール

本基本計画策定後、大阪・関西万博閉幕までの主なスケジュールは以下のとおりである。  
(令和4年3月時点)

